



環境悪化が緊急事態の中国 20年間緑に貢献する日本人

財団法人 地球人間環境フォーラム専務理事 **平野 喬**

中国の大気汚染が日本にも深刻な影響を与え始めました。PM2.5という聞きなれない微粒子の汚染物質が黄砂とともに日本列島に大量に飛来し始めました。黄砂だけなら、空が曇ってしまう鬱陶しさを除けば、海や山の栄養源になり、健康に悪影響を与える心配はほとんどありませんでした。

ニュース等で見ると、北京市なども工場地帯と見まがうようなどよんとした空のもとで、マスクをした市民が顔をしかめて歩き、世界第二位の経済大国の光景とは思えません。日本でも戦後の高度経済成長期に、コンビニナート周辺地域では同じような光景が見られました。「スモッグの下でビフテキを食べるか、青空のもとでイワシを食べるか」と、経済発展と環境保全のバランスをどのように取るか、国民の意見を二分するような議論になりました。

わが国はその後、官民の努力で公害を克服した国として知られるようになりましたが、公害対策を十分取らなかったために、国家の体制が壊れてしまった例があります。1988年の国連総会で、共産主義陣営の雄・ソビエト連邦のゴルバチョフ書記長が「国際経済の安全保障は、軍縮だけでなく、世界の環境への脅威の排除なしには考えられない」と演説して世界の注目を集めました。計画経済の共産主義国家に公害はないと宣伝されていましたが、当時のソ連邦には大気や水質

の汚染がひどい環境危険区域に国民の半数が住み、多くの人々が癌になつていると言われました。環境の悪化で国家存亡の危機にあってと言われ、その危険を訴えた演説から3年後、ソビエト連邦は崩壊しました。

こうした歴史的事実と今の中国を重ね合わせると、同じようなことが起きるのではないかと不安になります。中国の富裕層の間で今、日本の空気清浄機が飛ぶように売れています。一週間もするとフィルターが真っ黒になるそうですから、空気清浄機など買えない人たちの健康はどうなるのか。「経済優先のひずみ」に国民の怒りが爆発するのではないのでしょうか。

黄色い大地に広がる奇跡

隣国の環境問題に心を痛めていたところ、NPO法人「緑の地球ネットワーク」(大阪市港区市岡1-4-24・501、電話06-6576-6181)から、「黄色い大地に広がる緑」(草の根環境協力の20年)というDVDが届きました。この欄でも紹介したことがあります。砂漠化が進む中国・黄土高原で20年間も植林が続いている高見邦雄さんらの活動の記録です。山西省大同市で20周年を記念した式典が開かれましたが、尖閣問題で反日感情が高まる中国とは思えない、日中友



好の花が咲いたようなお祝いムードで盛り上がりつつあります。それもそのはずで、日本のボランティアも参加して植えた苗木は1880万本。砂漠の一部が緑の森になり、春にはアンズの白い花が咲き、アンズの種の収穫で農民の所得は100倍になりました。植林のほか、3つの村に井戸を掘り、小学校を4か所につくり、高見さんは中国人から最も敬愛されている日本人と言われているそうです。

中国の環境問題を解決するために日本が協力することは、日本のためになるという構図がここから見えてきます。日本の公害経験を持ってすれば、中国の大気汚染を「元から断つ」技術など得意中の得意です。車の排ガス除去、工場の煙突からの脱硫装置の設置など大きなビジネスチャンスでもあります。

「文明の前に森があり、文明の後には砂漠がある」と言われるそうです。黄河文明の栄華をしのばせるような高見さんたちの奇跡の森づくりが、国家の対立を越えた人類の明るい未来につながるよう祈らざるを得ません。

人の背丈より高く育ったマツ(NPO法人「緑の地球ネットワーク」のDVD「黄色い大地に広がる緑」より)

財団法人 地球人間環境フォーラム
環境省所管の公益法人。地球環境問題の科学的調査研究を目的に1990年に設立。
国立環境研究所・地球環境研究センターの研究サポート、研究成果の普及・啓発などのほか、月刊機関誌「グローバルネット」を発行。